



「湯けむり建築」 を愉しむ

画文家、編集者であり、(株)ブンガネットの代表取締役を務める宮沢洋氏は、温泉宿からスーパー銭湯、果てはスパやサウナまで、あえて泉質や効能ではなく「建築」の視点で温浴施設を涉猟し、ウェブサイトや出版を通して紹介している。「湯けむり建築」の味わい方をお聞きた。



(提供：(株)ブンガネット)

宮沢 洋 Hiroshi Miyazawa

画文家、編集者、元『日経アーキテクチュア』編集長。現在は株式会社ブンガネット(BUNGA NET Inc.)代表兼編集長として、建築の魅力を文章とイラストで発信。2023年から「みんなの建築大賞」推薦委員・事務局長、「東京建築祭」実行委員を務め、2025年度より文化庁「建築文化フェロー」。著書に『隈研吾建築図鑑』『イラストで読む 湯けむり建築 五十三次』『画文で巡る! 最強TOKYO建築図鑑』など多数。

『温泉・銭湯・スパ・サウナ イラストで読む 湯けむり建築 五十三次』

宮沢洋著／青幻舎刊

建築家が手掛けた全国の温泉・銭湯・スパ・サウナの中から厳選した53施設を収録。宮沢洋氏が実際に訪ね歩き、建築の見どころや設計者の工夫、入浴体験の魅力を紹介する。建築ファンはもちろん、温泉や旅を愛する人にもおすすめの一冊。



お湯に浸かりながら
建築を体験する

「宮沢さんは日本各地の温泉、温浴施設を「建築」という独自の視点をもって訪ね歩いておられます。その狙いを教えてくださいませんか？」

私は前職で建築専門誌の編集長として仕事をしていました。その後、「建築」の魅力をもっと多くの方々に知っていただきたいと思い、独立して建築・都市・デザインにかかわる情報を発信する会社を設立しました。建築を一般の方々にも開きたいという想いがあったんです。建築を考える時に、誰もが興味を持てるのは、温泉・温浴施設の建物ではないかと。それを「湯けむり建築」として広く紹介しようと、情報発信を続けてきました。もともと温泉好きが高じたとも言えますが(笑)。

「宮沢さんが著された『イラストで読む 湯けむり建築 五十三次』はその集大成。日本各地の、文字通り五十三件におよぶ施設が紹介されています。どのような基準で選ばれたのですか？」

身体に触れる建築空間というものはあまり存在しません。建築は視覚によって捉えられることが多いです。ところが、温浴施設は人間の五感でいうところの「味覚」以外の四感に加え、そこに満ちている温度や湿度を含めた直感的な第六感によって把握されます。人が持つセンサーを総動員して体感することになる。そうした建築を「体験」できる浴場を厳選しました。

「泉質や効能、湯ざわりといった優先的な興味に加えて、浴室の使い手として「体験」を通じて設計や建築の意図を読み取るということですね。」

ある著名な建築家が「階段とトイレの設計ができるようになって初めて一人前の建築家と言える」と看破しています。私はそこに、風呂場や浴室も加えていいと思う。見過ごされがちな空間にどれだけ神経を行き届かせることができるか。階段やトイレ、そして浴室には、心地よく過ごせる空間を造ろうとする設計者の細やかさが表れる。それが建物の重要な要素だと言えます。

ル・コルビュジエが設計した、著

「温浴施設の建築を楽しむ、味わうコツとは？」

湯船に入った時の空間の見え方にこだわることでしょう。その瞬間、まさに建築を体験することになる。施設のホームページやパンフレットにある洗い場の写真からは伝わらない体感を得ることが出来ます。一見、とても優れた空間設計に見えたとしても、実際に湯に浸かってみると、正直なところ、これを作った人は風呂に入ったことがあ

るのかな? 露天風呂は外にあればいいというものではないだろう! と、首をかしげざるをえない施設も

設計者の意図を読み解く

温泉温浴建築の愉しみ方

人々を魅了してやまない温泉。日本固有の文化としてユネスコ無形文化遺産への登録を目指す活動が熱を帯びている。更に今年、2026年は千年に一度の「026(おふろ)」の年だという。関連する企業や団体が元気にPR事業を展開中だ。サウナもすっかり定着し、一過性のブームからカルチャーの域に達しつつある。日本人はお風呂が大好きだ。お風呂と聞いただけで心がほっこりする。温泉が恋しい季節。その癒しの空間にこだわり、創造してきた人たちの声を集めた。極上のお湯を愉しみながら多彩な温浴建築に浸る。

特集

愉悦の 「建築浴」

ありました。一方で、浴室とは直接関係なさそうなディテールにまで配慮されていることに気付くと、その設計者の建築空間に対する志を感じることが出来ます。そもそも、湯けむり建築にはルールや制限といったものがあまりなくて自由度が高い。建築家の「その人らしさ」が表出しやすいんです。

― 最近の温泉宿の設え方はかつてのそれとは違った流れがありそうです。

私自身、子どもの頃は温泉宿といえばコテコテの和風建築、小屋組みの宿泊棟、薄暗い浴室という印象でした。今は「和」をモチーフにしながらモダンなものに変化させていく潮流があります。その象徴的な事例が、岡昇平さんが手掛けた湯河原町の「湯河原惣湯^{そうとう}」。もともとこの共同湯（近年は足湯）をリノベーションした施設です。黒を基調とした和の施設で、露天風呂が川に吸い込まれるように開かれている。その浴槽をあえて壁板で囲って少し暗くしています。意図的に景観を絞って空間を魅せている。そこへ視覚的にズームインすることで心が動くような素

敵な空間になっています。

和をベースとする一方で、全く新しい世界観を創ろうとする試みもあります。北海道白老町の「界ポロト」の内湯は、アイヌ民族の仮小屋に用いられる「ケトウンニ」という三本の丸太で組んだとんがり屋根をモチーフにした建物の中にあります。これが露天風呂につながっているのですが、そこにいたるには内湯の奥にある小さな三角形の空隙をくぐる必要がある。薄暗い内湯からポロト湖を一望する露天風呂に出た時の光のまぶしさは感動的です。

設計した中村拓志さんは、建築を通して「物語」を紡ぐことがとても上手い。温泉と建築の体験を物語として持ち帰ることが出来ます。

― 確かに最近の温浴施設の設計や意匠には驚きに近い感動をもたらしてくれるものが多いですね。

新しい施設だけではなく、開業から時間が経った滋味深い温泉施設もあります。宮城県の名湯鳴子温泉にある「早稲田栈敷湯」は、戦後間もなく早稲田大学の学生たちが実習で掘り当てた温泉を、半世紀を経て同学の教授だった石山修武さ



湯河原惣湯 惣湯テラス

設計：設計事務所岡昇平
所在地：神奈川県足柄下郡湯河原町宮上704(万葉公園内)
開業：2021年
公募により選定された民間事業者が公園の整備運営を担うPark-PFIのスキームによって開設された。通りに面した「玄関テラス」から10分ほど山道を辿っていくと温浴施設「惣湯テラス」にいたる。上部の木製ルーバー越しに差し込む柔らかな光が美しく映える。
(写真提供：湯河原惣研株)

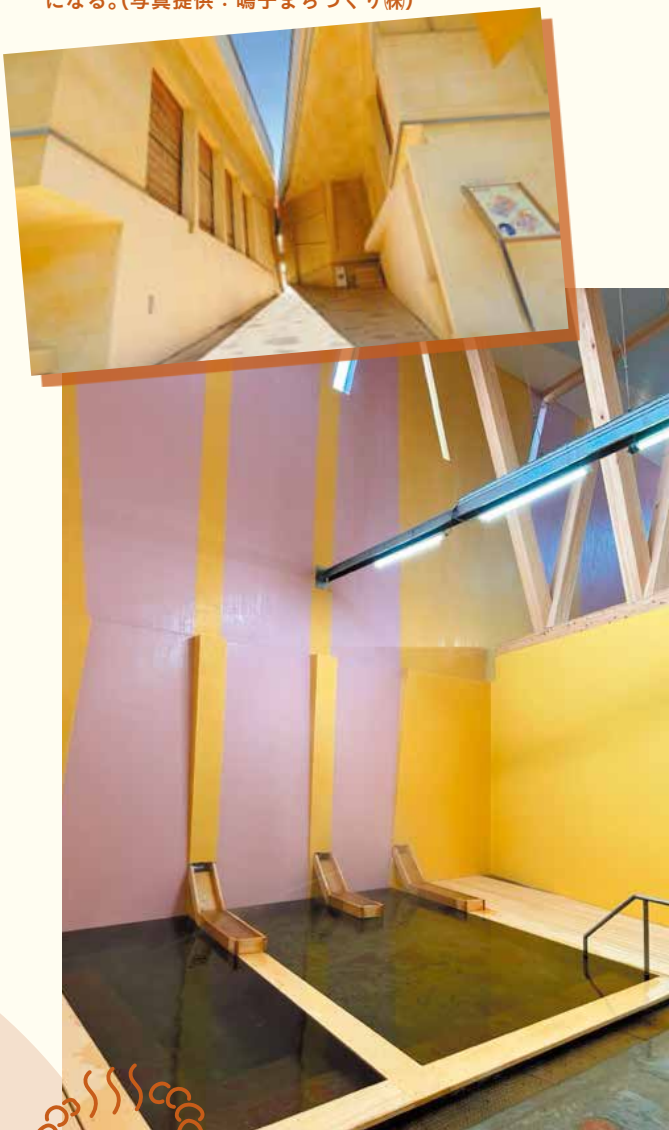


界ポロト

設計：中村拓志+NAP建築設計事務所
所在地：北海道白老郡白老町若草町1-1018-94
開業：2022年
三角錐の屋根の下に浴場の一つ「△湯」がある。奥の小さな出入口を抜けると露天風呂。海や湖、周辺の景観と一体化したインフィニティ温泉が話題だが、ここではポロト湖の湖面に溶け込む絶景を満喫できる。(写真提供：界ポロト)

鳴子・早稲田栈敷湯

設計：早稲田大学石山修武研究室
所在地：宮城県大崎市鳴子温泉字新屋敷124-1
開業：1998年
黄色い外観は一見温泉施設とは思えない佇まい。入口までは傾斜のある狭い路地を下りていく。浴場は逆に階高が高く開放的な印象だ。湯気で天井が見えない。古代遺跡でお湯に浸かっている気分になる。(写真提供：鳴子まちづくり株)



人が設計、一九九八年に開業した日帰り湯です。とにかく天井が高い。そこにモウモウとたまる湯気越しに外光が降り注いでいる。三〇年近く経って漆喰もいい味を出しています。極楽浄土か古代遺跡の中で湯に浸かっているような心持になります。ある意味難解とされる石山さんの建築ですが、ここは誰もが理解できる作品の一つ。太鼓判を押せます。

人に癒しと感動を与える力を持っています。訪れる人の感覚に迎えようとする建築家の姿勢は、温浴施設に限らずあらゆる建築物に共通するテーマとも思えます。

びっくりさせることは建築の使命の一つですが、視覚的なインパクトだけではなく、やはり「体験」としての驚きを醸成できるのが湯けむり建築。一般的にも建築に対する関心は高まっています。施設側も泉質や効能、独自のおもてなしに加えて、このお風呂を誰が設計し、建てたのかについて、もっとアピールし

てもいい。建築家も温泉、温浴施設という稀有なモチーフを通して建築を語ることはできるはず。そうした空間の物語を発信することで、温泉ファンだけではなく少し違う層が反応することもあるでしょう。そのためにも建築家は、湯を味わう人の視線に立って、もっとお湯を愉しむべきです。各地の優れた温浴施設を体感して、クリエイターとしての創造力を自ら刺激する。そうすれば、従前の湯けむり建築を超え続ける好循環が生まれると期待しています。

温浴施設を通して建築を語る

― 湯けむり建築は、その湯を楽しむ



女川温泉ゆぼば

所在地：宮城県牡鹿郡女川町女川2-3-2

開業：2015年

左/浴場 右/外観



ショウナイホテル

スイデンテラス

所在地：山形県鶴岡市

北京田字下島ノ奥23-1

開業：2018年



スパ棟



クアパーク長湯

所在地：大分県竹田市

直入町長湯3041-1

開業：2019年

左/バーデゾーン 右/歩行湯

温泉建築を楽しむための要素とは何だと思いますか？

温泉には、人の五感に迫ってくるものがあります。浸かっているうちに感覚が研ぎ澄まされ、触って感じる要素も多い。床や浴槽の材質にはどんなものが採用されているのかを、手足の感触で確かめる楽しみがあります。肌で触れて楽しむという体験には、温泉建築を設計するうえでまだまだ追求の余地があると思います。

設計で重視することは何ですか？

開放感のある空間づくりは最も重要な要素です。これまで携わってきた施設でも、風や光を取り込むなど、浴室に開放感を生み出す設計を重視してきました。一方で、温泉施設にとどまらず、居心地のいい空間を創るために、その建築が周りのコンテキストに対してどのようにあるべきかを、設計するうえで常に考えています。その土地の自然や景観と一体となるべきだと思います。

これまで手掛けた温泉施設の中から、代表的なプロジェクトについて教えてください。

「女川温泉ゆぼば」は、女川町の町鳥であるウミネコが羽ばたく様子をイメージした真っ白な屋根が特徴です。男女の浴場の仕切壁を最低限にとどめ、壁面のタイル絵をどちらからも見られるようにしています。町場の銭湯のようなスタイルで、そこに光が満ちているようなデザインです。

「スイデンテラス」では、美しい田園風景を壊したくないという強い想いが設計の起点になりました。田んぼの中に建物が浮いているような開放感と、プライバシーとの両立を図るため、大浴場の開口部や客室の窓の配置に工夫を凝らしました。

「クアパーク長湯」では、温泉療養型の健康増進施設を整備したいという竹田市の要望を受け、男女共用の歩行湯を提案しました。傍らを流れる芹川に沿って風光明媚な景観を楽しみながら回遊できる約50mもの半屋外の歩き湯をメインに据えました。



建築家

坂茂

Shigeru Ban

1957年東京都生まれ。1985年に坂茂建築設計を設立し、東京、パリ、ニューヨークを拠点に活動。住宅や公共施設など国内外で幅広いプロジェクトを手掛けるとともに、災害支援にも取り組む。主な作品に「紙の教会」「ポンビドー・センター・メス」「SIMOSE」など。プリツカー賞(2014)、アメリカ建築家(AIA)ゴールドメダル(2026)等受賞。



人の心を癒す温泉空間。その魅力をつくる設計思想や工夫について、4名の建築家にインタビューした。



左/浴場 右/家族風呂

ラムネ温泉館

所在地：大分県竹田市直入町大字長湯7676-2

開業：2005年



建築家

藤森 照信

Terunobu Fujimori

1946年長野県生まれ。東北大学工学部卒業、東京大学大学院博士課程修了。建築史家・建築家。東京大学名誉教授。東京都江戸東京博物館館長。近現代日本建築史研究の第一人者であり、45歳より建築設計を開始。自然素材を用いた独自の建築で高い評価を受ける。主な作品に「ラ コリーナ近江八幡」「高過庵」「空飛ぶ泥舟」など。

温泉建築の魅力とは何だと思いますか？

温泉に対する日本とヨーロッパの違いはとても面白いですね。日本では、リラックスしたり、お風呂を楽しんだりする娯楽施設の面が強いですが、ヨーロッパでは医療施設として捉えられています。ドイツのバーデン・バーデン、チェコのカルロヴィ・ヴァリが有名ですが、医療行為として温泉に入るので、専門的な医師がついて入浴時間を決められたり、温泉を飲んだりする。更に、入浴・飲食・宿泊が別々のところにあるので、街を回遊し、街全体で療養の時間を過ごすのが特徴です。このようにその土地の文化や暮らしが反映されるところがありますね。

これまで手掛けた温泉施設のプロジェクトについて教えてください。

「ラムネ温泉館」がある大分県竹田市の長湯温泉は、炭酸ガスを含む特殊な湯で、辿り着くことが簡単ではないにもかかわらず、大佛次郎をはじめとして多くの文豪に愛された魅力ある温泉です。

ラムネ温泉館は、もともと江戸時代から「湯庄屋」という肩書でその土地の温泉を代々管理してきた方が営んでいる温泉旅館から依頼を受けたものです。依頼主の旅館は、戦前からドイツの温泉地と交流があり、職員をドイツに留学させて海外の温泉を学ばせるなど、日本の温泉とは一線を画したものを目指していました。入浴・飲食・宿泊の機能が分かれているヨーロッパの温浴施設にならない、ラムネ温泉館も単独の温泉棟として計画しました。

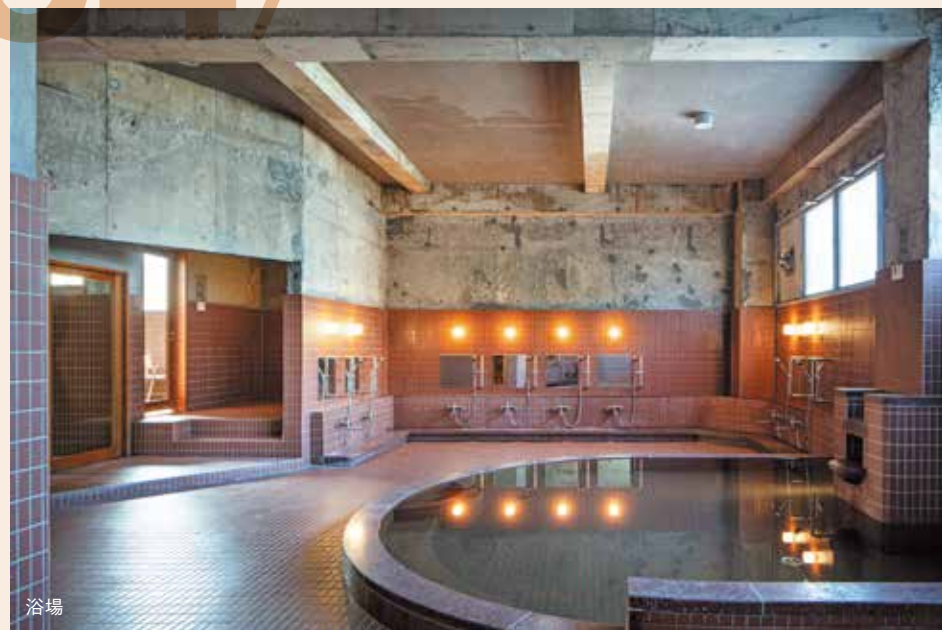


外観

「ラムネ温泉館」の設計で重視したことは何ですか？

炭酸を肌で感じるができる重炭酸温泉の特徴的な泉質を生かすため、炭酸が抜けて効能が損なわれないよう、湧出地点からの距離や浴槽の大きさを考慮するなど、温泉の性質を生かす工夫を随所に施しています。また、日本の風呂は洞窟や地下の湧出地に由来する閉ざされた空間であることが多いことから、茶室のにじり口のように、浴場の入口をあえて狭くし、内部には漆喰を用いました。

外観については、耐久性を高めるため外壁に焼杉板を、屋根に銅板を採用しています。建築としての存在感を持たせながらも、周囲の景観になじむデザインを目指しました。



浴場



島湯

所在地：香川県小豆郡土庄町甲5165-216
開業：2024年

浴場内サイン。床から2100mmを境に、コンクリート躯体をあらわした上部には施工現場の墨出しをモチーフにしたグラフィックを、タイルで仕上げた面には白い樹脂パネルを用い、異なる素材の対比を生み出している



サウナ



Photo: Yuriko Takagi

建築家

長坂 常
Jo Nagasaka

1971年大阪府生まれ。1998年東京藝術大学卒業後、スキーマ建築計画を設立。家具や建築から都市にいたるまで領域を横断し、カフェ、ショップ、ホテル、公衆浴場など国内外で多彩なプロジェクトを展開。主な作品に「Sayama Flat」「BLUE BOTTLE COFFEE」「武蔵野美術大学16号館」「狛江湯」「Teshima Factory」など。

温泉建築の魅力とは何だと思いませんか？

人と湯気が出入りする温泉建築は、まるで呼吸しているような印象があります。その存在が町に潤いや温かみを絶えず供給しているところが魅力的です。僕にとっての温泉建築の魅力は、建物単体というよりも、町との関係性の中にある部分が大きいですね。

設計で重視することは何ですか？

ただ、建物の見た目がカッコいいというだけではなく、多様な人たちを受け入れる寛容な面持ちをつくることを大事にしています。

これまで手掛けた温泉施設の中から、代表的なプロジェクトについて教えてください。

「島湯」は、小豆島にある築40年のオーキドホテルの改修計画です。人口減少が続く小豆島の現状を踏まえ、1つのホテルという冠で施設を囲い込むのではなく、共存共栄を目指し町に開かれた施設にしたいと考えました。そのため、「島湯」「島飯」「島泊」とあえて分けることで周辺施設と連携しながら、訪れた方々に多様な過ごし方を提供し、島全体を盛り上げるきっかけになることを目指しました。引き算的デザインにより、残された要素に新たなストーリーを描き足し、一見古く見えたディテールや仕上がりも新しいもののように蘇らせました。浴場では、躯体コンクリート剥き出しとタイル張りを組み合わせ、そのタイルには、改修前から浴場で使われていた赤茶色の御影石の色を採用しています。既存のコンテクストを生かしつつ変化を与えることで、新旧の強いボーダーを生まないようにしました。敷地内の改修のみならず、共存共栄の町としてのリノベーションにもつながる「見えない開発」です。また、現在改修中の長崎県の五島で唯一の温泉公衆浴場「荒川温泉」(来年開業予定)では、島の人に愛されてきたお風呂なので期待の大きさと責任を感じながら取り組んでいます。



星野温泉 トンボの湯

所在地：長野県北佐久郡
軽井沢町星野

開業：2002年

上/内湯
下/外観

星のやグーグァン(HOSHINOYA Guguan)

所在地：424台湾台中市和平区博愛里東關路一段温泉巷16号
開業：2019年



内湯

温泉建築の魅力とは何だと思いませんか？

日本ならではの温泉文化が魅力を作ってくれていると思います。温泉だけではなく、銭湯や大浴場での経験の影響もあると感じます。温泉・温浴施設は、大きな浴槽と40度前後のお湯というシンプルな構成だけで十分成立すると考えています。そのうえで、建築が建つ土地の自然や景観、地域の風土といった多様な環境によって付加される要素が、施設ごとの個性を作ってくれます。

設計で重視することは何ですか？

その場所が持つ特徴を、デザインの個性として表現することを常に意識しています。地形や眺めなどが優れているロケーションならばよいですが、いつも恵まれているわけではないので、その環境を魅力に変える設計を心がけています。また一方では、利用者が心地よく寛ぐための細かな寸法やマテリアルなども重要であり、多様な視点から設計することが大事であると考えています。

これまで手掛けた温泉施設の中から、代表的なプロジェクトについて教えてください。

「軽井沢星野エリア」内の日帰り温泉施設である「星野温泉 トンボの湯」では、シンプルにお風呂を楽しむことを重視して設計しました。周辺の山や池などのランドスケープと建物の関係や、建築のスケール感などを大事にしながら空間を構成しています。台湾・台中市の温泉地にあるリゾート施設「星のやグーグァン」では、「The 日本の温泉」として内湯を設計しています。台湾にある「日式温泉(日本式温泉)」とは一線を画し、日本的な木質感を取り入れながら、素材や細部の寸法にいたるまでこだわりながら設計しました。



「常総ONSEN&SAUNA お湯むすび」の外観



株式会社 SAKURA PIRATES
代表取締役

酒寄 学 Manabu Sakayori

お湯むすびの設計は、温浴施設をハイブリッドで集客
時間帯の誘客を後押しし、アグリサイエンスバレー常総の賑わい創出に大きく寄与している。

専門に手掛ける(有)アクアプランニングが、施工は商業施設建築のエキスパート(株)イチケンが、それぞれ担った。戸田建設はオーナー、事業主体として施設の運営に当たる。タッグを組んだのは温浴施設の運営専門企業(株)SAKURA PIRATES（サクラパイレーツ）だ。同社の酒寄学代表取締役は、お湯むすびの「田園のなかのプチリゾート」というキャッチフレーズは必然だったとこう話す。「清々しい田園風景を一望できる立地は最強のアピールポイントです。夕方になると富士山の山影も望める。高速道路のインターチェンジからも至近で、日帰りでの眺望とともに天然温泉とサウナを存分に満喫できます」。

気軽に楽しめる一階の天然温泉フロアは主に地元市民の利用率が高い。一方、二階のバリエーションに富んだサウナエリアは男女がともに楽しむことができることもあり、若年層を中心に比較的遠方からも多くの人が訪れる。「近隣の市民の皆様と遠方からのお客様、言い換えれば『安近短』と『広域集客』という双方のニーズに対応できるハイブリッド型の温泉施設です。日常的なお風呂と非日常的なサウナを兼ね備えたという意味からもハイブリッ

カルチャー化するサウナ
お湯むすびの最大の推しはやはり充実したサウナだろう。酒寄氏は日本ではサウナの進化が加速していると話す。「設計が確定した二〇二三年頃には、サウナはブームとしてのピークを過ぎていたと思います。今後は単なる流行ではなく、カルチャーとして定着していくと見込んでいたため、天然温泉に併設してサウナを強めに推していると考えました」。

しかし、サウナが並んでいるだけでは持続性は期待できない。スパ銭湯にもサウナはある。従来の概念から一歩踏み込んだサウナの仕立て方が必要だと酒寄氏は考えた。「サウナでの過ごし方を変えたいと思っています。お湯むすびには映画鑑賞ができるサウナ室があります。六〇から七〇名を収容するホールサウナではアイドルグループなどのライブも開催しています。サウナがカルチャーとして昇華して

温泉温浴施設づくりに携わる 建設会社2社の取組みを紹介



田園風景に佇む 日常のリゾート

〔常総ONSEN&SAUNA お湯むすび〕

賑わいを醸成する温浴施設

戸田建設(株)が常総市(茨城県)とともに農業の六次産業化を目指す官民連携事業「アグリサイエンスバレー構想」に着手したのは、一〇年以上前のことだ。この食と農と健康をテーマとした一大産業団地の開発プロジェクトは各界から注目を集め、「アグリサイエンスバレー常総」は二〇二三年にまちびらきを迎えた。一昨年十一月、その都市エリアに温浴施設「常総ONSEN&SAUNA お湯むすび」が開業した。コンセプトは「田園のなかのプチリゾート」。一階の天然温泉、高濃度炭酸泉に加えて、二階には同施設最大のホール型サウナをはじめ館内着または水着を着用して男女で一緒に利用できるサウナ八室を備え、男女共用サウナエリアとしては関東最大級を誇る。更に、地元食材を堪能できるレストランやリラクゼーションスペースも擁する。隣接する「道の駅 常総」「TSUTAYA BOOKSTORE 常総インターチェンジ」との相乗効果を存分に発揮し、癒しとともに、ショッピング



戸田建設株式会社
戦略事業本部
国内グループ事業統轄部
グループ事業営業部
部長

松井 行太 Kouta Matsui

や食を楽しむ新しいエリアとして賑わいを見せている。

戸田建設グループ事業営業部の松井行太郎長にお湯むすび整備の背景を伺った。「本事業では農業の六次産業化に加え、新しいまちづくりを進めるうえで賑わいの創出が大きな課題となりました。その核となる施設が『お湯むすび』。自社がオーナーとなり、道の駅やTSUTAYA常総とともに、まちの活性化を加速させる温泉施設に位置付けられます」。道の駅開業後、一年間の来場者は目標の二倍、二〇〇万人に達した。昨年度は四〇〇万人を超えているという。しかし、道の駅は十七時で営業を終了。TSUTAYA常総は二十一時までだが、その間の来街者は減少する。お湯むすびは二十三日まで営業を継続してこの



湯けむり越しに 天下の険を望む [オークラリゾート 箱根強羅]

「長期にわたってホテル運営を協働して、着々と施工が進んでいる。西松建設がオーナーとして用地と建物を所有し、運営をホテルオークラに委託するスキーム。両社の協業は今回が初めてではなく、国内では「ホテルJALシティ富山」、海外では「グランドニッコー・バンコクサトーン」などの実績がある。『長期にわたってホテル運営を協働して、着々と施工が進んでいる。今回は日本を代表する観光地である箱根・強羅エリアにおいて、高い事業性が見込めると判断し、本プロジェクトに着手しました。』オークラリゾートブランド』として国内初となる案件です」と西松建設ホスピタリティ事業開発部の安藤学部長は説明する。

全体の設計は浅井謙建築研究所(株)、デザインはフランス出身のグエナエル・ニコラ氏が率いる(株)キュリオシティ、施工は西松建設が担当する。延床面積は九、六五〇平方メートル。地上三階地下三階の西棟、地上四階の東棟、両棟合計で五八室の客室を擁する。デザインのコンセプトは「FOREST HIDEAWAY」森の隠れ家。傾斜のある独特の立地を最大限に生かし、強羅の豊かな自然環境と調和する洗練された空間を目指すという。

特筆すべきは、全室のバルコニーに露天風呂を設えたことだ。その湯は美肌の湯として名高い大涌谷温泉から引いた。同ホスピタリティ事業開発部の石井雄大氏はその狙いを次のように話す。「客室からは明星ヶ岳に連なる山々を見渡せます。夏には大文字焼が開催され、その絶景が眼前に迫ってくる。この最高の



西松建設株式会社
環境・都市開発事業本部
アセットバリューアップ事業統括部
ホスピタリティ事業開発部
部長
安藤 学 Manabu Ando

箱根の絶景を 露天風呂から独り占め

昨年末、西松建設(株)は、(株)ホテルオークラと協働し、箱根町強羅にリゾートホテル「オークラリゾート箱根強羅」を開業すると発表した。二〇二九年のグランドオープンに向けて、着々と施工が進んでいる。



いくのであれば、映画や音楽といった他のカルチャーと共通する文脈が見えてくる。安近短のレジヤを考えた時にどのお風呂屋さんに行くのかではなく、どう過ごすかが大

切になります」。お湯むすびではその「過ごし方」を追求していくという。ホールサウナには幅約四畳のステージがある。背面のガラス越しに田園風景を一望できる。可動壁を設置すればライブやトークショーなど多様なイベントに対応できる。今後はショートムービーの上映や、出演者・監督を招いたトークイベントも計画しているという。松井氏もこう言葉をつなぐ。「サウナは温浴施設としても独自性の強い施設です。一方で酒寄さんが指摘するようにカルチャーに向かう過渡期にあるのだとしたら、お客様に楽しんでいただくために視点も変えていかなければなりません。事業性を考慮しながら検討を進めています」。

そうした視点は道の駅、TSUTAYA常総を含めたエリア全体にも向けられる。道の駅の食堂は、休日の昼食時ともなると大変混み合い、更に十七時には閉店してしまう。そこで、施設利用者限定だったお湯むすびのレストランを一般客にも開放、テイクアウトも可能とした。「食事のためにお湯むすびに立ち寄っていただければ、それだけ認

知度は高まります。次は道の駅で買っ物をして、サウナと天然温泉を楽しんでみようということになる。そうしたシナジーにつながればと期待しています」と松井氏は話す。酒寄氏も「急に入浴施設を利用するのはハードルがあるかもしれませんが、レストランをきっかけに気軽にご利用いただければと思います」と続ける。



右/お湯むすびのレストランで供される食事
左/天然温泉の露天風呂

ロケーションを露天風呂から心行くまでお楽しみいただけます。国内外から多くのお客様に訪れていただきたいと願っています」。自然環境や地域の魅力を最大限に生かす滞在施設は、日本を代表する温泉リゾートになると胸を張る。強羅というエリアで温泉をメインに据えることは必須だが、全室に露天風呂を備えた仕様は国内でも希少な存在だ。安藤氏は「雄大な景観を前にしてコンセプト通り自然に溶け込むことができます。そのすべての部屋のバルコニーに露天風呂がある。差別化を図るうえでも最大のアピールポイントになります」と話す。

インバウンドも満喫できる 温泉文化

箱根町によると、二〇二五年の町内への観光客数は二、一〇〇万人余りに達し、七年ぶりにコロナ禍前の水準に回復した。訪日外国人は約六三万人で、その伸び率は前年比二七％を超え、全国平均を大きく上回った。都心からも近く観光資源が集中する箱根、なかでもラグジュ



西松建設株式会社
環境・都市開発事業本部
アセットバリューアップ事業統括部
ホスピタリティ事業開発部 第2グループ

石井 雄大 Takehiro Ishii

アリー化が加速する強羅エリアは、インバウンドからも更に注目を集



最上階の大浴場の完成イメージ

めることになるだろう。オークラリゾート 箱根強羅は国内需要をベースとしながら、インバウンドに向けた配慮を欠かさない。安藤氏はこう説明する。「最上階に開放感と眺望を楽しめる大浴場を設けましたが、やはり味わっていただきたいのは各室の露天風呂です。海外のお客様は一度に大勢で入浴するという習慣がありませんから、大浴場に抵抗感

を持つ方もいると考えられます。プライベートの露天風呂であれば、気兼ねなく日本の温泉文化に触れていただくことができると考えています」。大浴場は、広い開口部を設けることで箱根の雄大な景観を存分に楽しめる空間とした。更にドライサウナとミストサウナを併設し、外気浴スペースも確保している。「サウナはインバウンドからのニーズも大きい。大自然の中でゆっくりとクールダウンしていただけます」と安藤氏は話す。

開発と施工、双方の視点でつくる 温泉リゾート

ゼネコンがホテルを開発し運営する、そのスキームにも特徴がある。安藤氏がその優位性を説明してくれた。「構造設計と施工は当社が担当します。インシヤルとランニングのコストバランスを常に検証できる体制があるということです。例えば傷みやすい温泉の配管など、先々のメンテナンスを見据えて資材を選定、判断することが可能です。地盤



バー（上）とスタンダードルーム（下）の完成イメージ。館内のいたる所に大きなガラス窓が設えられ、どこにいても強羅の絶景を目にすることになる。温かみのあるグリーンとベージュの基調色が落ち着いた和の空間イメージを醸し出す

が複雑な斜面という立地においても計画段階から施工部隊が参画することによってコストに照らして合理的な基礎構造、施工方法を仔細に検討することができました」。ゼネコンが計画から施工までを一貫して主導するメリットは今回も十分に生かすことができたと話す。

長期にわたって施設の健全性を維持するメンテナンスの合理性は、利用者のホスピタリティを持続可能なものとする。同部の野村範子係長もこう付言する。「通常ならばデベロッパーと施工者は受発注者として相對していますが、このスキームではその関係性が社内で完結しています。コミュニケーションが密に取れることは、ゼネコンがメインプレーヤーとして開発に当たる最大のメリット。コストについても風通し



西松建設株式会社
環境・都市開発事業本部
アセットバリューアップ事業統括部
ホスピタリティ事業開発部 第2グループ
係長

野村 範子 Noriko Nomura

オークラリゾート 箱根強羅は、来館者に「リトリート」を供すると謳う。慌ただしい日常から距離を置き、非日常的な空間で自身と向き合い心身をリセットする旅のスタイル。同館では、客室やそのバルコニーに設えられた露天風呂だけでなく、ロビーやレストラン、バー、大浴場など、館内のいたる場所から箱根の山並みをダイレクトに体感できる。ここで過ごす時間自体がリトリートの源泉になる。「オークラリゾート」はホテルオークラが継承してきた「日本の美意識」と「和の心に根差したもてなしの精神」を礎とした、リゾート領域における新たなブランドだという。オークラリゾート 箱根強羅は、その国内第一号となるホテルであり、温泉は日本が誇る「文化」だ。ラグジュアリーな空間の中で、その文化を心行くまで愉しめる日が待ち遠しい。

温泉と大自然で リトリート

がよいので正直に対話することができます」と話してくれた。